

知り合いの出版社社長から、書籍離れ現象と不況を嘆じられた直後だったから余計にか、興味をそそられた。先週末公開された英仏合作映画「ガーンジー島の読書会」の秘密」のタイトルである。舞台は第二次大戦で独軍に占領された英領の島。接收をかわして隠した豚肉を食べる島民の集まりが露見しそうになり、とっさに「読書会」とごまかした。

急ぎ集めた本でそれらしい体裁

の会合を開くが、本を読んで率直



読書会の秘密

ka-ron

論火

二 研 木 玉

に意見を出し語り合ううち、占領下の闇に光が差すような精神の自由を覚え、会は定着する。

そうか、こう朗読すれば——。一人で黙々と読むだけではなかなか見えない世界が広がる。

対等な空間を生み、異なる意見を受け入れ、フェアな競争、知的な遊びの場となった。

「海防論」をめぐる会読の討議で若い藩士が「日本のような海国では離島まで守れない。一時は敵に委ね、寄せ来るのを打ち砕く防備を」と述べると、列席した藩主が激怒、むきになって反論した。

昔の会読を想起させるが、大きく異なるのは「報い」の有無だ。江戸期、藩校や塾などで好成绩を上げても直ちに身分を超えた立身出世にはならない。その意味では

本筋は戦時に隠された悲劇をめぐる人間ドラマ。読書会はいわば脇役だが、集う人々が解放感を共有し、対等な絆を強めるのは本が持つ力の表れに違いない。

目を転じると、日本でも読書会の歴史は長い。かつては「会読」などといった。今も各種の読書会は教育や仕事の現場から同好の緩やかな集いまで、多くある。

名著「江戸の読書会 会読の思想史」（前田勉著、平凡社ライブラリー）は、そうした豊かで多様な知的刺激を備えていた近世日本を描き出している。

この席では対等の相手である。今学校教育は、読み取る力、表現する力の不足を憂え、「グロー

バルな人材」を育てるアクティブラーニング（主体的・対話的で深い学び、と訳す）を掲げる。

ああ、こんな見方があるのか。

さかのぼると、封建身分制度に

殿様といえどもそんな場での討

現する力の不足を憂え、「グロー

なるだろうか。（客員編集委員）